

# 「彫刻のあるまちづくり」 初の市民参加作品 『長浜4899』



「彫刻のあるまちづくり」はゆとりとゆるおいのあるまちづくりを目指して82年に始まり、第1号作品である水上公園の「風のプリズム」などの彫刻作品を公園や道路など公共空間に設置してきた。行政の取り組みによって民間によるモニユメント設置の例も増え、市民アンケートの結果で屋外彫刻に関心を持つ人が7割に達するなど、おおむね好意的に受け止められている。しかし、すべての作品が成功しているわけではなく、作品と場所との関係性がみられないなどの批判もあり、財政事情も厳しいなか、なぜ彫刻を設置するのかという問いかけがなされている。

そこで都市景観室では彫刻のあるまちづくりを見直す作業にとりかかった。見直しの方向は、たんなる彫刻設置でなく一定のテーマを設定し市民との協働で作品周辺の空間も含めた整備を行うおうというもの。市民参加を積極的に取り入れて真に豊かな都市をつくるための事業展開を検討している。

この流れでの最初の作品が福岡市立心身障害福祉センター前のアート作品である。今回はコンペ方式で作品を募集し、センター通所者との共同作業が条件とされた。障害を持つ人々の自信と誇り、施設や作品への愛着をもたらし、バリアフリーの「豊かな都市づくり」への市民の関心呼び起こすことを目的とした、福岡市初の市民参加による作品である。

コンペの結果選ばれたのは、作品の表面に貼りつけるタイルの制作に多くの人々が参加できる松尾伊知郎氏の作品「長浜4899」。センターで療育に励む幼児やリハビリに通う人など1000人近くが粘土をこね、思い思いのタイルを制作した。子どもたちはおかささんと一緒に手形や足形を残したり、粘土の表面をひっかいて絵を描いたり。

大人の参加者には松尾氏から「目、耳、口をつくらう」というテーマが出され、お互いや自分の顔を触りながら和気あいあいと作業する姿が見られた。制作したタイルは松尾氏の手で大きな動物のような形をした作品にまとめられた。見るだけでなく触ったり、中に入ったりにして楽しめ、センター通所者だけでなくセンター前の歩道を通る人々の間にも会話を生み出す作品となった。

今回は、作品の制作に直接市民が関わるかたちでの市民参加を試みたが、ほかにも作品のコンセプトづくりや作家・作品を選ぶ審査の過程に参加してもらうなど、いろいろなやり方が考えられる。アートを媒介にしたまちづくりは今始まったばかり。「長浜4899」の制作に参加した人たちが見せてくれた生き生きとした表情が、やがては福岡のまちのたたずまいに反映されることを願っている。